（郵便物認可）　（本號六面）　明治二十四年四月七日　（定價二錢）

時事新報

時事新報は一年三百六十五日一日も休刊無し

時事新報定價
特事新報へ一年三百六十五日一日モ休刊セス其代價
遞送料廣告料ハ左ノ如シ
一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓
〇時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ遞送スルモノニ限リ右定價ノ外ニ一箇月十五錢ノ遞送料ヲ申受ク

時事新報廣告料前金

一行五號活字廿四字詰	一行	一日限	一日以上
	一行	六日迄	七日以上
	一行目	十二錢	十一錢
	一行目以下	十一錢	十錢五厘

月曜日并に大祭祝日の翌日等他新聞紙の休刊日に限り時事新報配達の求めに應ず此場合には新報代價一箇月前金八錢にして地方に郵送する分は此外に郵便の實費を申受く可し

第二千九百八十二號
明治廿四年四月七日　火曜日
舊曆辛卯二月廿七日　（癸、亥）
月出午前五時二十二分　入午後六時六分
出午前四時三十四分　入午後四時九分
滿潮午前四時四十七分　干潮午後四時十六分
（西曆一千八百九十一年）

時事新報

機を見て先づ自から節減す

遍般以來東京株式取引所の仲買が所に向て要求したる三件の中に就き最も主要なるは手數料の中より稅金を引去りたる殘高配分の割合にして前後數次の會議も懇談も專ら重きを此點に置き昨今漸く四分を株主に取り六分を仲買に與ふ可しと云ふに役員の內意を定めて所謂要求委員ある仲買に返答に及び其餘の紛紜も漸く結了したるよし是れより先き懇談の席に於て役員の內意四六に在るを聞くや仲買四人の委員は是非三七にはと主張せしのみならず仲買人全體の意見は最初の立案八分を仲買へ二分を株主へと云ふ其二八の割合より五厘を勘辨し二分五厘と七分五厘に定めて夫れより以上は決して引く可らずと痛論したるほどなりしに今や直に役員の案に滿足の意を表し只管其勞を謝し今後の圓滑を望ひの外おきもの〳〵にして剛柔俄に其勢を變じたるは蓋し大抵の邊に見切りさるとき或は得る所おきに終らんとを悟りしにも由る可しと雖ども取引所の役員が先づ自から大に經費を節減して改正の實行に誠を示したるみそ其最も重もある原因ならんと思はるゝなり

聞く處に據れば此度の改正に由り株主の損する所は凡そ金一萬八千圓にして一株に付九圓即ち一割近くの配當を減ずるゝとあれば二八の割合は固より論外にして三七も亦行はる可き限りに非ず下て四六の配分論さへ容易く決定に至らざりしも亦怪ひに足らざれども役員が金二萬二千餘圓の經費豫算に就き六千餘圓を削減して株主への配當に充はし一株に付き九圓の減額を六圓に止めんと決心したるより終に大株主等をして斷然四六の改正に納得せしむるに至りたるものおりと云ふ同じく經費にても業務に關するものを非常に減じて爲めに取引の狀況を招くことおらんには其不利益は遂りて仲買株主共者の頭上に落ち來る可きを以て容易に雙方の同意を得ざりしならんなれども其削減法たる最も簡單にして人員の方に及ぼし殊に從前重役の所得に歸したる金額凡そ六千圓おりしものを大に減じて三千六百圓に改めたるが如き他の節減を布らげて各自から自省の念を起し不審の際に疑判を圖潛おらしめたるの事實は掩ふ可らず人間萬事の爭論、常に數理にあらずして情感に在りとは今回の一例を見ても之を知る可し

右は東京株式取引所の近事にして事固より小おりと雖も推して之を大にすれば大政府の近事に就ても亦通用す可し政府は國會の豫算減案に同意して目下頻りに政費の節略に忙しく差向き官吏の沙汰を行ひ非職免職その聲喧しき樣子おれども我輩が每度論じたる如く國會議員の目的とする所は必ずしも小吏輩の數のみを減じて其月給費を國庫に餘まし以て自から滿足するものに非ず表面にみそ政費云々と唱ふれども其實は今の當路の貴顯と稱する輩が爵位を以て威張り車馬官宅を以て誇り俸給豐にして榮華を極むるを見て不平に堪へず心裏に之を羨望しおながら左ればとて口に之を公言するも聊か鄙劣おるが如し是に於てか政費節減おどの案を立て〳〵裏面より政府の困難を釀造するものにして俗に云へば政府を困らせてやるまでの策おれば苟も當局者にして人情を知るの明あらんには早く事の內實を見て取り政費節減の眞先きに進んで自から大に節し爵位車馬官宅等の如き兒戲に等しき外觀の假裝を廢し俸給を薄くして態と質朴の風を作り以て一時の人心を和するみそ爲政の機轉あれ斯くすればとて爲政者の快樂を失ふに非ず政權を固くして地位に安んじ各自の伎倆を伸ばすには却て幾段の便利ある可し若しも然らずして今日のまゝに差置くときは假令へ吏人を沙汰して多少の政費を減じ豫算査定の數に叶ふみとあるも來期の國會には重ねて第二の難題を生じ其困難は前期に異おらずして年々歲々苦しき心配を免かるゝみとおく政府は恰も國中羨望の燒點と爲りて四方八方より目を注けられ終には孤立して一人の最貧おきに至る可し唯氣の毒おうと云ふの外おし偶ま株式取引所の近事を聞見したるに付き序おがら一言して當局者の機轉を促すものおり

雜報

○朝鮮國王の廢立に就て　支那の李鴻章氏より朝鮮國王に送りたる密書の主意は國王をして位を太子に讓らしめんとするものおりとの噂おりて世人の注意一方ならざる事なるが朝鮮國にては當二月八日科擧を行ふ筈にて八道の有志は例年の如く上京せしかば定めて春秋の二期に擧行する科擧おらんと思はれしも實際然らず國王の有志は例年の如く上京せしかば定めて春秋の二期に擧行する科擧おらんと思はれしも實際然らず國王を太上王に封じ世子を立つる慶事科擧おれば國論沸騰遂に今日まで延期したりとの說おるを以て直に信ず可き筋に就き聞く所に據れば領議政沈舜澤氏右議政鄭范期氏と閔泳駿氏は世子を立て南面し政を攝せしむべしとの議を上疏したりしに忠君愛國の聞え高き李裕翊氏は之に反對論を唱へ國王南面して政を執り又世子を立て南面せしむるとは天に二つの日おるとの一般おりとて上疏しければ廟議一決して沈舜澤以下を門外に放ち待罪せしめけれども國王不在或は事故おるの日い世子黨の議論は勝を占め國王不在の日に限り世子南面して政を攝するは其例おきに非ずとて國王も遂に之を允可し三月二十四日沈舜澤以下を免して參朝せしめたるの事實は李裕翊氏を非なりとして流罪に處し同月二十九日に廢事科擧を行ふに決したれど李氏は感慨禁ず能はずして朝を去らず此際袁世凱氏の運動頗る怪しき有樣おり詳細の事は後便に報道すべしと三月二十七日京城發の報に見ゆ

○ビスマーク侯益々秘密を發ぐ　ビスマーク侯は此頃一書を公にせんとの計畫おり但し其書は彼の伯林會議に先立ちて諸外國と秘密の商議を爲したる事及び三國同盟の近年の實情を詳しく記して土耳其希臘及び英國が過る二年の間は大に欺かれたる事等を知るに足ると云ふ左れば獨逸政府の秘密を發くものおるが故に政府をして咎むるみと能はざらしむるが爲め侯が往復したる手紙の形にして出版する由と佛國新聞に見ゆ

○軍艦發着　軍艦磐城は去る二日佐世保へ、又高千穗、扶桑、大和、葛城、武藏の五艦は三日品海へ又軍艦石川は去月三十一日宇品へ軍艦千珠は去る四日品海へ就れも投錨、又筑波、天城の二艦は去る四日館山灣に向ひ橫須賀を、同鳳翔は同日御手洗に向け呉港を比叡、金剛の兩艦はシンガポールに向けコロンボを、赤城は同日三ケ濱に向け呉港を就れも振錨せり

○露國皇太子ニコラス親王殿下　萬を有する一大强國を統治し給ふべき露國皇太子ニコラス親王殿下の眞影おり殿下は今帝アレキサンドル第三世の長子にして千八百六十八年五月六日を以て誕生せられ本年本月滿廿三歲にして母后をアリヤ　ダグマル　后と云ひ二皇弟二皇妹おり殿下は昨年希臘皇子ヲヨーヤ親王殿下等と共に東洋巡遊の途に上り給ひ印度に暫時滯遊の上支那及び我日本に向ひて出發せられ本月の末頃長崎港に來着せらるゝ筈おりと云ふ因に記す茲に掲る殿下の眞影は十八九歲の頃寫し給ひしものなりとぞ

掲ぐるは他年一日露國皇帝の位

○測量士官の陸軍歩兵中隊　地方へ同成旅團の地方へ測量團へ何れも去る

○東向會の發會　開き帝國議會四項の素願を盲人獨立の事○各を弘むる事

○大學通俗講　於て開きたんにして元良氏の事に就て英米二國と經濟學の有樣話し來りしも之を携ずれば

○廨舍探檢　では打絕へて南極を探檢するものおかりしに瑞典人ノルデンスクヨールド氏は今度之を思ひ立ちて目下用意の爲め歐洲を巡廻中おり氏は彼の北極探檢を以て有名おるパロン　ヴオン　ノルデンスクヨールド氏の子にして父の業を續ぎ南北の探檢を完了せんとして思ひ立ちたるおり一行中には種々の專門の學者を伴ふ筈にて旅行費總額一萬磅の內半額は既に濠洲メルボルンに於て約束整ひ尙は他にも約束したるものおり探檢日數は十八箇月の見込みにて氏は本年二十八歲おりとぞ

○廨舍　清學と云へばすれども近來りたれば今日べからずとの說の局を結ぶが頃近編清學知さるれば夫おがら實に今するのみにしるべし面して潤中を脫するんと欲するのせずんばおる

○朝鮮國　佛國宣教師は佛國宣教師公使は本國政と始むる都合事情を報場せの說にわらねコステ氏の宣